

を持ちながらも肝腎の楽器が大方失われてしまったのは、運命の悪戯だろうか。

## 調律師

弦楽器のリサイタルやアンサンブル、そしてオーケストラのコンサートなどが開始される前に、聴衆がいるのも全く意に介せず、といった風情でプレイヤーがステージで楽器の音を合わせている。通常はラの音を基本にして全員が音の高さを揃える。弦楽合奏の場合はコンサートマスターの音、オーケストラのように管楽器が使用されている場合にはオーボエの音に合わせるのが、世界共通の習慣だ。ピアノやチェンバロのような鍵盤楽器が入っている場合には、この楽器に全員が合わせる。

鍵盤楽器、特にピアノの音を調律する、という仕事には「調律師」と呼ばれる専門技術を持った人間が必要になる。ピアニストにとって必要不可欠のパートナーであるが、典型的な「縁の下の力持ち」であり、決して表には出てこない。

調律に必要な五十個前後、重さにして七、十キロの道具をアタッシュケースに詰め、例えばピアノリサイタルであればその都度——ということとは、同じホールで毎日リサイタルがあれば連日そのたびに——ピアノを調律・調整する。そして演奏中には万一の場合に備えステージの袖に待機している（のが建前である）。レコーディングのように極端な精密さが要求されるような場合にはつきっきりとなり、必要に応じて休憩ごとに楽器をチェックする。

コンサートホールのピアノ、音楽学校のピアノ、スタジオのピアノ、個人住宅にあるピアノ……と、ピアノの存在する所には必ず出没する黒子のような人である。

聴覚を頼りにする職業のためどうしても能力の個人差が出てくるが、トップレベルの技術者の場合、アーティストにつき添って世界中旅行することも稀ではない。常に異なった場所や状態の違う楽器をプレイヤーの好みに合わせて調整するのも大変であるが、苦勞はすでに飛行機に搭乗する時点から始まる。

先のとがった凶器のような道具や鋼鉄のワイヤー、加えて、その気になったら飛行機を分解できてしまいうような一連の工具は、必ずと言って良い程安全チェックの際に問題になり、調律師という職業がこの世に存在し、その道具を使ってどこへ何をしに行くのかを空港警備員に理解してもらえるまでには、しばしば大汗をかかなければならない。だからといってチェックインの際にこの鞆を預けてしまつては、もし何かあった場合にお手上げである。

その昔クラヴィコード、チェンバロ、そしてピアノの前身であるハンマーフリーゲルが全盛だった時代には、まだ楽器の大きさも機構もそれ程発達していなかったため、自分の楽器の調律ぐらいは演奏家や他人の手を借りずに行なうことができた。今日でも自分で調律をするチェンバリストは珍しくない。(補足しておく)と、ハーブは弦が多いにもかかわらず今日でも常にプレイヤーが自分で調律しなければならない楽器である)しかしその後、「純正調」という比較的耳で聞き分けやすい音律から、「平均律」という、調律の際に音程を微妙にコントロールしなければならぬものに移行し、同時にアクションも複雑になり、調整にも時間がかかるようになってきた。この頃から演奏家と楽器のメンテナンスを受け持つ技術者との分業化が始まったようだ。時代的にはウィーン古典派以降といえよう。

前世紀までは楽器を製造した職人自身がその顧客と密接にコンタクトを持ち、調律であれ修理であれ全てをこなしていた。しかしその後それよりも一段分化が進み「調律師」という職業が完全に独立したのものとなったのは――資料がないので断言はできないが――どうも今世紀になってからのようである。

調律師は一人前になるまでのカリキュラムの一部として、ピアノの設計図を制作してみる事はあるが、本

来はピアノの調律・調整と修理が本業である。ピアノ一台につき鍵盤の数こそ通常八十八だが、張られている弦は総計約二百三十本、アクションの部品は全体で四千七百〜五千個にまで及ぶ。これだけのものをパランス良くまとめるには正確な知識と豊富な経験が必要である。

ピアニストと調律師との関係は、現代のドライバーと車の修理工場との関係にも似ている。車の構造について全く知識がなくとも運転はできる。ピアニストも同様で、楽器内部がどう作られていようと演奏は可能である。しかし餅は餅屋、専門家に任せられる所は任せた方が、車にせよ楽器にせよ、より良い性能が引き出せる。反面、多少の知識は持ち合わせていた方が簡単な故障の際に慌てずむし、修理を依頼する時にも的確にその故障を指摘し、自分の希望を伝えることができる。

同じ味つけの料理を食べても、しょっぱく感じる人と味が薄すぎる、と感じる人がいる。同じ人が同じ物を別の機会に食べても、その時の体調、まわりの環境などによって、これまた同じ味には感じられないことがある。

ピアノの調整にも同様の事が言える。同じ楽器でもその時によって鍵盤のタッチが重くも軽くも感じられるのだ。とりとめのない単語で表現された演奏者のフィードバックをその都度的確にフォローし、満足できるように準備するのが、調律師の勘と腕との見せ所である。どうも今日のピアノは重くて弾みにくい、というピアニストのリクエストに対し、さもアクションを全て調整しなおしているような素振りを見せながら実は演奏用の椅子の高さを一センチ程高くするだけにとどめ、それがたまたかえって調律師としての技量を信頼されるようになった、とは、ある有名な技術者から聞いた話である。

調律師も果たして「アーティスト」なのか、あるいは単なる「エンジニア」であるのかは微妙である。い

ずれにせよ徹底した裏方の仕事であり、どんな名人芸を持つとも決してそこに自己の表現を求め、自分だけの世界を築く事はできない。しかし現実の話、ピアニストになるよりは調律師をめざした方が人並みに稼ぎ、人並みに暮らせる確率ははるかに大きい。

## 自動ピアノ

「一大決心をしてピアノを買った」のだが、その後の期待に反して、思った程は活用されない場合がある。場所ふさがだが、せっかく買ったものを捨てるわけにもいかない。人様に差しあげるには高価だし、かと言って売ってしまうのももったいない。埃がたまらないよう、と大切にカバーをかけて保存しているうちに、上には本が積まれ、人形が飾られ、花瓶が置かれるようになる。多少の違和感はあるにせよ、他の賢い利用法といってもそうはない。

それではあまりにもったいない、ピアノを何とか本来の目的に沿って生かす方法はないだろうか、演奏するピアニストの調達が難しいのであればそれを機械に代行させよう、という考えは、今世紀初頭から存在していた。幸いピアノの鍵盤は当時もかなり精密に規格化されて生産されており、鍵盤の幅はもとより、床から鍵盤面までの高さのメーカーによる差もそれほど顕著ではなかった。その結果考案されたのが機械によってピアノの音を鳴らす演奏装置——いわゆる「自動ピアノ」である。

この新製品はまだレコードなどのオーディオ製品が普及する以前の一九二〇年頃、主にアメリカで広く親しまれていた。かなり大型の機械で幅もピアノと同じぐらいあり、ピアノの鍵盤に対応する位置に沢山のレバーが下向きに並んでいる。装着される穿孔ロールペーパーの情報に従ってレバーが上下に動き、ピアノの